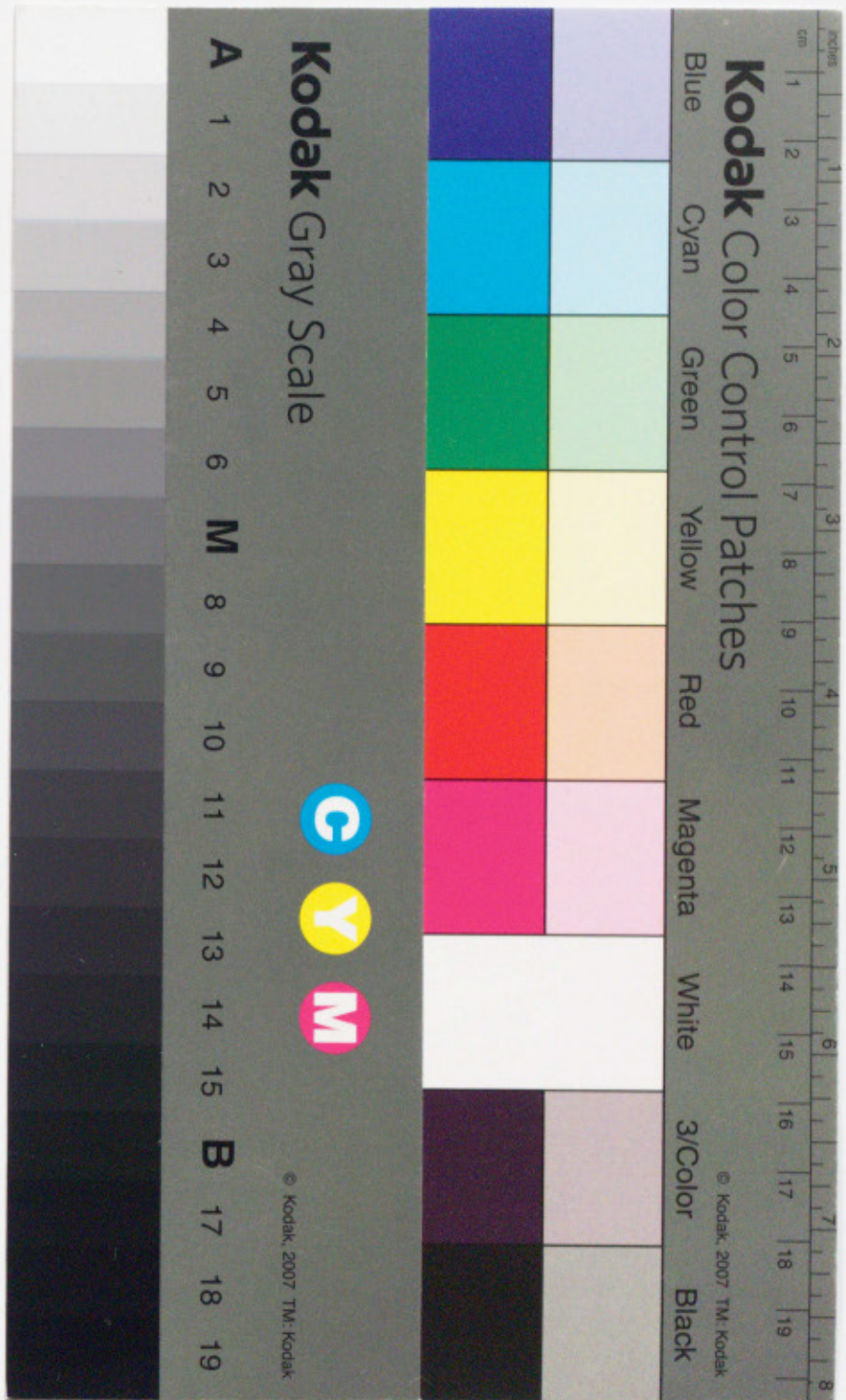


かかみかはらの むかし話

各務原市小学校国語同好会



60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2

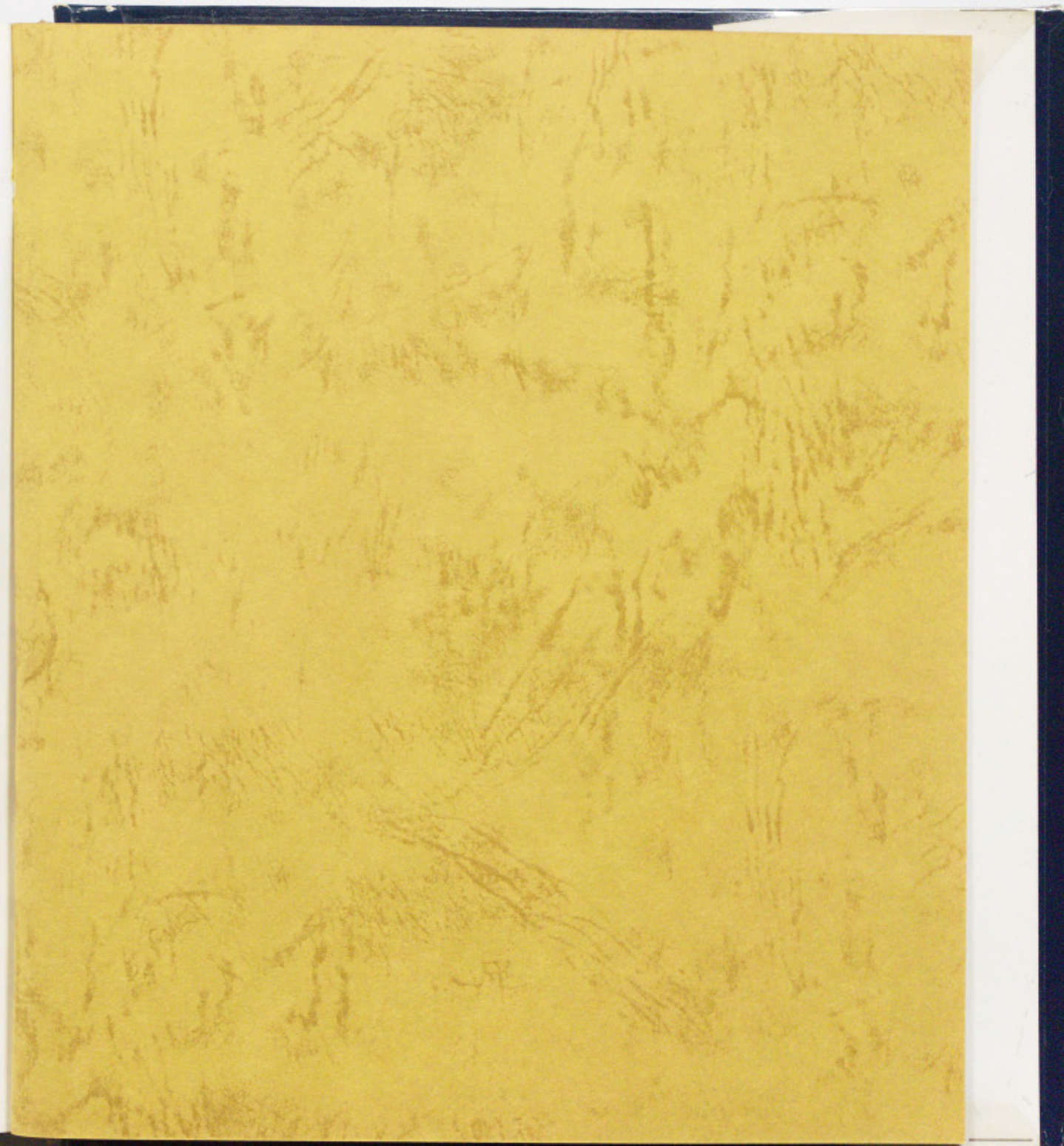


かがみかほらの
むか(話絵園



かかみがはらの

むかし話



目次

はじめに
この本を読まれる方へ

那加のはなし さしえ 柳 勇

手力雄神社のりゆう 3

浪見塚 9

与三郎池 14

ねずみ小僧といろは茶屋 21

うばがふどころ 27

キツネずきなおしょうさん 36

稲羽のはなし さしえ 柳 勇

西入坊のへびにようぼう 51

夫婦岩のてんぐの話 59

べんてんさまのびわ 62

じんろくやしき 72

あわずのちょうちん 88



鶉沼のはなし さしえ 辻 竹男

おがせ池の宝刀 99

若狭の八百比丘尼 105

会津の観音さま 112

りゅうぐうのせん貸し洲 117

金鳥づか 121

鶉沼川のあらそい 126

よめふり坂 134

蘇原のはなし さしえ 辻 竹男

おししさま 143

持田のキツネばなし 151

弁慶と立て岩 162

ごんげん山のふたつ岩 171

東門奴 179

あとがき 186





表紙題字 各務原市教育長 水口一也
表紙、口絵 小島政信
さしえ 辻竹男・桐勇

はじめに

私の生まれは、郡上の山奥です。たいへん寒さのきびしいところで、ひざがうまるほどの雪もたびたびふったものです。

そんな雪の日は、いろいろのかたわらで祖父からよくむかし話を聞いたものです。祖父が、しわだらけの手でなわをないながら「キツネ火の話」や「ふくべがだけの鬼たいじの話」をしてくれるのを、どんなに目をかがやかせ、身をのりだして聞いたかしれません。

私は今も、ふるさと郡上の山々、木々、川などをそうした話と、いっしょになつかしく思いだします。私の心に生きているふるさとは、山うばが、おどろおどろとびだしてくるうっそうとおいしげった森であり、りゅう宮に通じるという深いあい色をたたえた川であります。

ふるさとを愛することは、まずふるさとの自然や土地などに深いしみを感じることから始まります。

みなさんが「かかみがはらのむかし話」を読み、ふるさと各務原にますますしたしみとほこりを持ってくださることを、心から願っています。

なかの はなし



この本を読まれる方へ

この本にかかれたいくつかのお話は、何百年も昔から口伝えに語りつがれたものばかりです。各務原に住みついてきた多くの祖先の汗と血、土に親しみ土に生きぬいてきた人間の心がしみこんでいるのです。

ここ二、三十年の間にくらしが急に便利になり生活文化がはげしく進歩したのはよかったです。そのかわり人びとの心から、土のおいや、人間らしい味わいがなくなってきました。

このごろは、おじいさんやおばあさんからきいた心のあたたまるようなおもしろいお話をしてくれるおとうさんや、おかあさんも少なくなりました。

それで各務原市の国語同好会の先生方が、なんとかこんなすばらしいお話が消えてくならないうちに、本に書いてのこしておこうと考え、三年間かかってまとめ上げたものです。どうかこの本を読んで、あたたかい心の子ども、心の豊かな子ども、各務原の地を愛するよい人になってほしいと思います。

おわりに、このしごとにあたたかいお導きとご支援をいただきました各務原市教育長水口一也先生、国枝栄三先生はじめ、市校長会の方々にあつく御礼を申し上げます。

昭和五十三年七月

那加第一小学校長 杉山郁男

てぢからのおお
手力雄神社のりゆう

むかし、手力神社のそばに、寅とらさという人が住んどらしたげな。
寅とらさは毎朝、暗いうちに、手力さまにおまいりしてきてから、畑
へ行かせる人やつたそうな。

その日も朝はよう、

「このごろ畑をあらされて、こまっております。どうぞ畑を守って
くださいまし。」

と、おまいりをして帰ろうとすると、古井戸の方で、バッチャン、
バチャ、ピチャと音がするんや。うす暗い上に、朝もやがたち、は
つきりはしんが、何やら、おっそろしく大きなもんが動いとるんや



て。目をこすり、こすり、そうーとすかして見ると、何とおどろいたことに、りゅうやないか。りゅうが井戸から頭を出し、からだをうねらしとるんや。びっくりした寅さは、もうこしがぬけそう。むちゅうでうちへにげ帰ったげな。

こわいもの見たさはだれにでもあること。寅さも、おてんとさまがのぼってから、また古井戸に行ってみたんや。そして、やっぱ井戸のまわりがぬれとって、りゅうのらしい足あとがついとったんや。そこで寅さは、あわてて近所のしゅうに話したもんで、村中大さわぎ。おおぜ

いが古井戸のまわりにあつまってきたんや。

「この足あとなら、こないだわしんとこの畑にもついちよったぞ。ひつどう畑をあらしやがって。」

「そうや。丸池まるいけの方へ行く畑は、みんなめちやくちやや。」

「りゅうなんぞ、どこから来たんやろ。」

と、みんなは口ぐちにいい合つとった。その中のひとりか、ひよいと、おはいでんの上の木ぼりのりゅうを見あげて、

「見りやあ見るほど、ほんとうにようできたりゅうや。生きとるみたいやなあ。」

といった。そして、

「おい。このりゅう、ちよつとへんやないか。」

と、大声をあげたもんで、みんながよってきた。

「な、みてみんさえ。ちよつと、からだがしめつとると思いんさら

んか。」

「そーいや、そーや。」

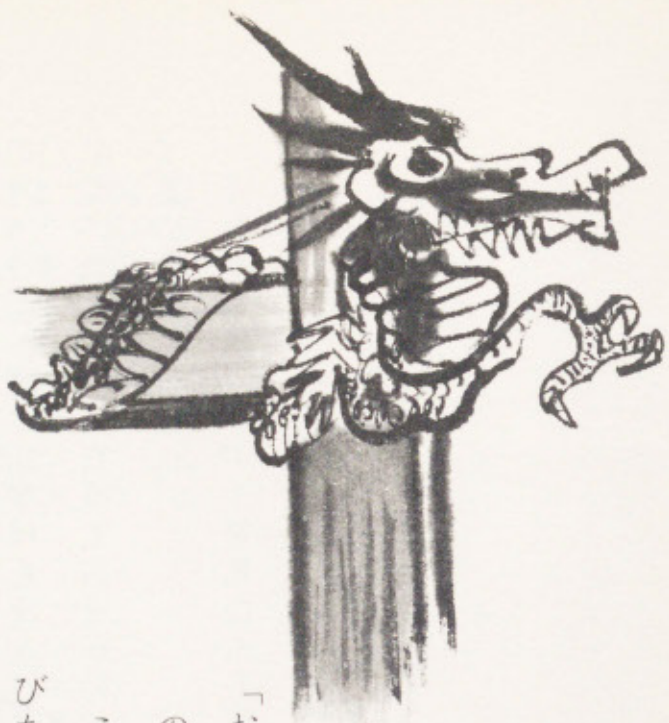
「ほうしると、このりゅうのしわざやったんやろか。」

「まさか……………」

村のしゅうはきつねにつままれた
た思いで、おはいでんわきにほ
れた二頭のみごとなりゅうをなが
めとつた。とつぜん、寅さがいった。

「あつ、左がわのりゅうがもつ
つた玉がないぞ。」

「玉なら、こつちのりゅうがもつ
ちよるぞ。」



「おつかしいな。たしか左がわのこ
のりゅうがもつとつたはずやに。」

こんなことがあつてからも畑はた
びたびあらされたそうな。丸池や境

川へ行く畑はもうぐちやぐちや。そのたんびに寅さは、りゅうがも
つとる玉を見に行つたんや。

「きょうは左のりゅうがもつとる。やっぱ、このほりものりゅう
がやつたにちがいない。」

と寅さは思いこむようになった。

村のしゅうも寅さのいうことがもつとものように思えて、より合

うたびに、

「こうもたびたび畑をあらされては、わしらも食うもんにこまるわ。なんぞ、ええ考えはないもんかなあ。」

「りゅうは神さまのお使いかもしれんし……。」

と話し合つては頭をかかえこんだそうな。

村のしゅうと神主さまは、よくよくそうだんのすえ、おはいでんのりゅうが二度と出歩けんようにと、目玉に大きなくぎをうつことになつたんや。たたるとおそがいで、ようくおはらいをして、うつてまつたんやげなに。

それからは、りゅうを見た人も足あとすら見つけた人もなかつたそうや。

坂井 多美子

浜見塚

むかしむかしのこと。

浜見塚（新加納）の

下まで海の水がきとつ

たころ、赤坂（大垣）

から犬山までは舟にの

つていったもんやそう

な。ちようど七里ぐらい

あつたらしく「七里の

渡」と、よばれとつた。



ほら。耳をすましてみい。こんやも舟をこぐ音が聞えるやろ。浜見塚のな、灯明をめじるしに、すきな男にあいにくる娘の舟をこぐ音や。

「やつと浜見塚の灯明がみえてきた。あの人はこんやもきて、まっどつてくれるやろか。
はよ、あいたいな。」

このなかのよい若い男と娘はな。はじめは犬山に住んどつたが家のつごうで男だけ赤坂の方へ行つてしまった。男がいよいよ赤坂へ行くことになった日、娘はどんなにかさびしかったろう。

「もういつあえるかわからんのやね。
どうしたらええのやろ。」

娘がそういうと、男もだまって考えこんでしまった。

やがて、はたとひぎをうって

「そうや。月に一度、月のない夜やつたらだれにもわからへん。ちようどまん中へんの浜見塚の灯明をめじるしにあうことにしよう。」

ふたりは、かたいやくそくをして別れたということや。

それからはな、月に一度灯明のあかりをめじるしに男と娘は舟をこいだそうや。

浜見塚の近くの人にはなかのええふたりを、こそつとながめていたもんや。

けどなあ。いつの世にもよくないやつがいるもんで、ふたりのなかがあんまりええのをやつかんで

「灯明の火をいっぺんけしたるか。めじるしがなけなふたりはあえやせん。よっしゃ。おもしろいでやつたるか。」



ある月のない夜、このよくない心をもつた男は灯明の火をこそつとけした。

そんなことはちつともしらんふたりは、いつものように灯明の火をたよりに舟をこいでやってきたんや。

ところが、この夜にかぎつて、どんだけ舟をこいでも灯明がみえやせん。波のカチャポンチャポンと舟べらをたたく音ばかり。

「どうしたんやろ。灯明がみ

えやへん。

ひよつとしたら、もうおらがきらいになつてあいとうないで火をけしたかもしれん。」

娘はもう男の心がかわつてしまったものと早がてんをして

「灯明めあてにきたものを なせにこよいはきえている。」

こんなうらみのことばを残してな。かわいそうに男をうらんで海へとびこんでしまつたんやと。

次の朝、ようよう明るうなつたとき、浜べでつめとうなつた娘をみつけた若い男はどんなにかなしかつたことか。

今はな。海ものうなつて広い田畑になつてしまつとる。男をうらんで死んだ娘のことなど誰もしるものはない。ただ浜見という地名だけがのこつているだけじゃ。



与三郎池

むかし、オチドのほとりに池があった。つつみの上に、マツとスギの林がおいしげり、いつも、そのかげをしずかに水にうつしていた。

ある年、魚つりのすきな秀さが、たまたまこの池につり糸をたれた。すると、つれるわ、つれるわ、あれよ、あれよ、というまにびく

いっばいになってしまった。

よろこんで村へかえり、みんなにとくいげに見せた。そしたら、わかいものらが、

「ようし。いちど、魚のかえどりをしてみよう。」

「きつと、たんと、魚がおるにきまつとる。」

「いっぺんも水をほしたことがないでな。」

と、いっだして、十数人のものが、手おけや、あみや、びくをもつて、いさんでかけだした。

ちようと、池のそばにたっている、与三郎どんの小屋まできた時や。中からひよろ長い顔をした与三郎じい、白いナマズひげをなでながら出てきて、

「やめどけ。かえどりはせんほうがええ。この池は、みんなしつとるじゃろ。日でりに雨乞いをする池じゃってことを。村のだいじ

な池じゃ。あらさんほうがええ。やめとけ。」
と、とめた。

けれど、わかい衆はきかなんだ。

「ことしは、雨もよう降つたで、水も不足しとらん。」

「いっぺんぐらい水を干しても、よかろうに。」

と、言うがはいか、腰まくりをして、たんとある水をみんなでかえだした。どんな魚がおるかたのしみにしながらの。もうすこし、もうすこしと、かえだした。けれど、魚のすがたは、なかなか見られん。ちようど、水がひぎのあたりまできた時や。

カンカンカント、はげしい半鐘の音に、びっくりして村の方を見ると、なんと黒いけむりがうずをまいて、火の手があがり、じぶんらの家が焼けているではないか。

おどろいたのなんの。われ先にと、おけに水を入れてかけおりて

いくと、これはふしぎ。なんのこともない。ちゃんと、家はたつて
いる。けむりの出ているところもない。おかしなことがあるもんや
と、また池へもどつた。

「あつ。」

だれの口からも声がもれ、目をこすりこすり、池を見つめた。

それもそのはず、なんと、池にはもとどおり、まんまんと水がた
たえられているではないか。

どうしたことや。

もう、みんなはきみがわるうなつて、水をかえだすのをあきらめ、
村へかえつた。

それから、なんのこともなく、数年がすぎた。与三郎じいも、い
つの年からか、ふいといなくなつた。



ある日、秀^{ひで}さは、もういっぺん、あの池で魚が釣りとうなった。ひとりりで、こっそり池にやってきて、つり糸をたれた。けれども、きょうはちつともつれん。つんつんと手ごたえはあるが、ひき上げると、えさだけない。あかな。もうかえろうか。と、あきらめた時や。大きな大きな魚をつりあげた。今まで見たこともないりつばな、ナマズだった。うれしくなつてびくを肩^{かた}にかけ、走るようにつみをかけのぼった。

その時、池の中から、

「おーい。与三郎^{よきょうろう}やーい。与三郎^{よきょうろう}やーい。」

と、よぶので、池の方をふりかえると、肩^{かた}のびくの中から、

「おおい。」

と、へんじがするんや。

びっくりしたのなんの。腰^{こし}がたたんようになってしまった。秀^{ひで}さ

は、数年前のこの池のできごとをしっているので、こわくなくてしまい、びくもつり竿も、ほうりだしたまんま、まっ青な顔で、ほうようにして家へたどりつき、そのまんまねこんでしまった。

それから、まい日、高い熱にうなされて、

「与三郎やーい。与三郎やーい。」

と、よびながら、とうとう息をひきとった。

このことがあってから、この池では、だれひとり魚をとるものなくなり、水草がおいしげっても、近づくものも、それを刈るものすらも、なくなってしまうた。

そして、「与三郎池」と、いうようになったんやと。

長谷川 恭子

ねずみ小僧こぞうといろは茶屋ちや



そのむかし、かかみ野は、とほうものうひろい野つばらじゃった。野つばらのまん中を、ずっと道が続いておった。

日のくれかかったある日のこと、むすめがひとり通りかかった。ずうんと歩いてきたんじゃろ、足がふらふらしよる。よほどうしろが気になるどみえて少し歩いてはふりかえりよる。と、まあその時、むこうにポツンとあかりが見えた。あかりを目あてにいそぎ足になった。やっとたどりついたのは一けん屋じゃった。「いろは茶屋」と、いってな、旅人をとめるやど屋やった。

やれ、やれと、むすめはつかれた足をのばして横になったと。け



うございます。」
ぼうさまは、むすめの青い顔に、
びつくりしたようじゃった。
「はて。それはお気のどくなこと
じゃの。」
「お助けくださいませ。」
しばらく考えていたぼうさまは、
「では、へやをかわってしんぜよ
う。こちらへおいでなされ。」
ぼうさまと、話ができただことでも
すめはいくらか安心したのか、旅
のつかれが出て、ようやくねむる
ことができた。



どな。なんとうきみわるいやど
屋で、雨戸はガタガタ。ろう下
はミシ、ミシ。ねどうてもねつか
れなんだ。
ところで、ちょうど、となりの
へやにぼうさまがとまってござつ
た。
「もうし。おぼうさま。」
「えっ。わしに声をかけたのはど
なたじゃな。」
「はい。旅のむすめでございます。」
「どうかなされたかの。」
「ただ、なんとう、おそろしゆ

ところが、ま夜中のことじゃ。むすめのふところをねらってやってきたものがおつたんじゃな。昼間、むすめのあとをずっとつけてきたやつじゃ。そうつとむすめのへやへしのびよつたのじゃが、何と、そこにねていたのは、むすめでのうてぼうさまやったから、どろぼうの方がおどろいてしまったわ。こしをぬかしてにげてつたど。それから、ぼうさまも、とろりとねむらっしやつたげな。どれくらいすぎたかのう。ぼうさまはむねのへんが苦しゅうて目がさめた。すると、こんどは、なんと男が馬のりになつておる。ぼうさまは、ふとんをはねのけるといっしよに男をつきとばしてやった。男はころがるようににげてつたそうな。が、ぼうさまの足にはかてぬ。とつつかまつて、なわでぎりぎりまきにされたんじゃが、よう見ると、やど屋の主人。いろは茶屋”は、やどの主人がぬすどをはたらく、大へんなやどだつたのさ。



もちろん、それから「いろは茶屋」はどりつぶされてしまった。むすめと、ぼうさまはあくる朝、わかれをおしみながら、べつべつの方へむけて旅立つた。

そんなことがあってから、やつと、月日がたつた。むすめは江戸のあるおやしきに、ほうこうしとつた。そのおやしきにどろぼうが入つたんや。そのどろぼうは「ねずみ小僧」といってな、びんぼうな人らにすかれつたど。むすめ

はつかまった「ねずみ小僧」を見て、びっくりしてしまった。それ、
ずっと前、「いろは茶屋」で助けられたぼうさまにそっくり
や。

『そうじゃ。おなじお人ももしれん。まちがない。まちがない。
でもまあ、どうしたことやろ。』

むすめは助けてもらったうれしきをはっきり思い出したと。

「ねずみ小僧」が江戸で、おしおきされたと聞いたあと、むすめ
はかかみ野へやってきて、「いろは茶屋」の近くに「ねずみ小僧」の
はかをたてたげな。

今でもちやんと残つとると。

国定 仁子

うばがふところ

各務原市尾崎小学校の北の山に、「うばがふところ」と、今もよん
でいるほこらがあります。どうしてこんな名まえがついたのでしょ
うか。

むかし、岐阜のお城がてきにせめられたときのことです。

数万のてきが金華山にせめのぼり、「わあわあ」と、ときのをあ
げながら、お城の門のあたりまで、おしよせてきました。むかえう
つみかたのさむらいたちも、ひっしでたたかいましたが、わずかな
人数でもあり、とても勝ち目はなさそうです。



いきおいにのつたてきのこうげきのために、きずついたさむらいたちがお城のあちこちにたおれ、うめいていました。おとのさまは、もうこれまでと、かくごをおきめになって、おくがたさまとあかちゃんのわかとのさまを遠くへ落ちのびさせるよう家来^{けらい}とうばにお命^{いのち}じになりました。

ふつうの道を通つては見つかるので、山道をにげることになりました。

ま夏の山の中は草木やイバラがしげり、マムシやムカデもいるので用心せねばなりません。山道になれないおくがたさま



の顔や手足には、イバラでひっかいたり、岩ですりむいたりして血がにじんできました。うばは、あかちゃんをふどころにつつむように、せなかをまるめて進みましました。

ひっしでにげているうちに、うばは、おくがたさまたちとはぐれてしまいました。

とほうにくれていると、とつぜん近くで、てつぼうの音がしました。つづけて、「おくがたさま……」

と、なきさけぶ家来^{けらい}の声かしたかと思うと、それを追うように、またてつぼうの

音がふたつ。それつきり声も聞こえなくなりました。うばは足がふるえて、その場に立ちすくんでしまいました。今、あかちゃんにいかれてはたいへんです。近くにいますはずのてきに気づかれてしまいます。あわてて、うばは自分のむねをはだけて、ちぶさをくわえさせました。ところが、すおうとしません。おちちが、ぜんぜん出ないのです。あせればあせるほど、うばのむねはドツキドツキと鳴るばかり。そしてきりきりといたまました。

「わかぎみさまは何としても、わたしがお守りせねば……。」

と、あかちゃんをだきしめ、てきが遠ざかるのを、息をこらして待ちました。

やがて、あたりのざわめきが遠ざかったのを見はからって、うばは、また山の中をひたすらにげました。

どのくらい歩いたのでしょうか。長い夏の日もかたむいて、山の

中は蚊^かがワンワン音をたてていました。あかちゃんは、おなかかへったのでしょう。ないてばかりいます。

「わたしのこのおちちさえ出てくれたら……。」

と何度もちぶさをしぼってみるのですが、ひとしずくも出ません。

どこかに人の住んでいる家はないものかと、さがしましたが、まったくの山の中で、見あたりません。

日は、とつぷりとくれてしまうし、声もかれがれにない。あかちゃんをだいて、うばは、とほうにくれました。

そのときです。ふと耳をすますと、どこからかチヨロチヨロと美しい瀬^せ音が聞こえるではありませんか。音をたよりに行ってみると、山ふところの小さなげけ下に、たしかに水がわき出ているのです。手ですくって飲んでみました。そのつめたくておいしかったこと。さつそく、なきつかれたあかちゃんの口へ、木の葉ですくって飲ま



せてやりますと、あれほど、ひどくないでいたあかちゃんが、ぴた

つとなきやみました。あんまりおいしそうに飲むので、何度もすく
つて飲ませました。

おなかがいっぱいになると、あかちゃんは気もちよさそうにねむ
つてしまいました。

「おかわいそうな、わかぎみ……。」

うばは、そう思うと、いくさのむごさになみだがこみ上げてきまし
た。

うばは、しずかに目をとじて、いのりしました。

「どうか、わたしのおちちが出るようになりますように。」

といっしょうけんめい、いのりつつづけながら、うばもその水を飲み
ました。

するとどうでしょう。ふしぎなことに、ふところがぬれて、おち

ちが出るようになっていたのです。うばは、そのまま、きゅうにつかれが出て深いねむりにつきましました。

34

足音に目をさましますと、朝早くたき木をとりに来たおじいさんが立っています。うばが、わけを話しますと、

「おお、お気のどくに。村の方は残党ざんとうがりがきびしいで、村へおりとんさつては、あかんぞな。」

と行って、かくまってくれることになりました。

こうして、うばは、村人の助けをうけながら、この山おくでわかぎみをりっぱに育てたということです。

それ以来、ここから出る水を飲むと、よくおちちが出るようになるといわれ、いつしか「うばがふところ」とよぶようになったそう

です。そして子どもが生まれる前や後に、このあたりの人は、かならずここにおまいりして、子育ての水をもらうようになりました。今も遠くから来て、この水を飲んで帰る人があるそうです。

坂井 多美子



キツネずきな

おしよじさん

むかし、むかし。

新加納の少林寺に、鼎州という
そりやあ、せわずきなおしよじ
んがおらしてな。

村の衆が、こまっとるときく
と、すぐに出かけていっては、相
談にのつてやったり、おいしいも
のがあると、わけてやったりして
な、みんなから、たいへんしたわ

れておりんさった。

おまけに、このおしよじさん。稲荷さんの信仰があつい人でなあ、
本堂のうらのおはかに、ときどきあらわれるキツネを、たいそうか
わいがりんさったそうな。ころものたもとに、いっばい、おかしや
くりをいれていっては、やりんさったりしたんやて。それで、いつ
のまにやら、キツネのほうがおしよじさんのおんさるのを、まつ
ようになつてな、そでにすがっておかしをねだったり、ひぎにのつ
たり、かたにのぼったりして、たわむれるようになったそうな。

そんなふうじゃったから、まいばん、まいばん、キツネの数もふ
えてな、本堂のうらは、まるでキツネの巣みたいになつてしまつたん
や。おしよじさんは、それでもめんどうがらずに、小ギツネには、
とてもすきな油げずしを、ちゃんとこさえてたべさせんさったりし
とつた。

でも、そんなことは、だれもしらへん。

「少林寺には、キツネがおるで、夜いくとばかさされるぞつ。」
と、みんなが、うわさをしあうだけやった。

ところで、あるとき、村のあちらこちらの家に、どろぼうがはいつてな、三月ほどは、そのどろぼうさわぎで、みんな頭をかかえこんだ。孫八さんとこのニワトリが、五羽とられたのがはじまりじゃ。留九郎さんとこは、米だわら二つもとられるし、藤十郎さんとこは、嫁にいく道具をよういしとんさつたのに、すつぺりやられるし……。

こんどは、庄屋さまんとこやというて、番小屋つくつて村の若衆が見はつたけど、なあに、お倉のかんぬきは、はずされ、あらされまつて、なんちゆうすごい大どろぼうやと、みんなあきれかえつとつた。そして、なんとかつかまえんと村じゅうが、びんぼうにな

つてしまうと、わいわいさわぎ出してなあ、のこるは、お寺だけやと、うわさをはじめた。

「おしょうさん。おしょうさん。ほんに、にくらしいどろぼうじゃ。

こんやは、きつと、このお寺にきますぜ。きいつけんさい。」

と、村の衆が心配してやってきた。

「うんにや。この寺じゃ、なんにもとるものあらへん。」

「そんなことはないやろな。坪内さまからあずかつとるだいな軸もあるし、りっぱな鏡もあるでねえか。わしら、こん夜は、この寺にとめてもらつて、ばんしたる。」

「そんなことせんでもええ。だいじょうぶ。わし、ひとりでええ。」
おしょうさんは、どうしたもんか平気な顔しておんさつた。

そして、あいかわらずおかしをもつて、キツネといいほどあそんでから、ぐつすりねむりこみんさつた。

つぎの朝のこと。おしょうさんが、いつものように本堂へいこうとしんざると、大きなびきが、稲荷さんのまつつてある前できこえてくるんやと。だれかいるんかなとおもいながら、しのびあしでおりにいきんさった。

すると、手ぬぐいでほうかぶりをした大きな男が、大の字になつてねているんや。そばに大きなふろしきづつみをおいてな。

「おい、おい。そんなところでねとつたら、かぜをひく。こつちへ、はいらっしゃい。」

と、ゆりおこしても、なかなかおきん。

おしょうさんは、いったいなにもなんやと思つてな、ふろしきづつみを、そつとほどいてみんさつたとたん**に**びっくりしんさつたのなんの、

「や、や、や。これは、これは。わしのだいじな水晶のじゅずじゃ。」

これはまた、青銅の香炉じゃないか。

でてくるわ、でてくるわ、かけ軸、花器、すずり箱、ひもぎいふとみんな、お寺のだいじなものばかり。

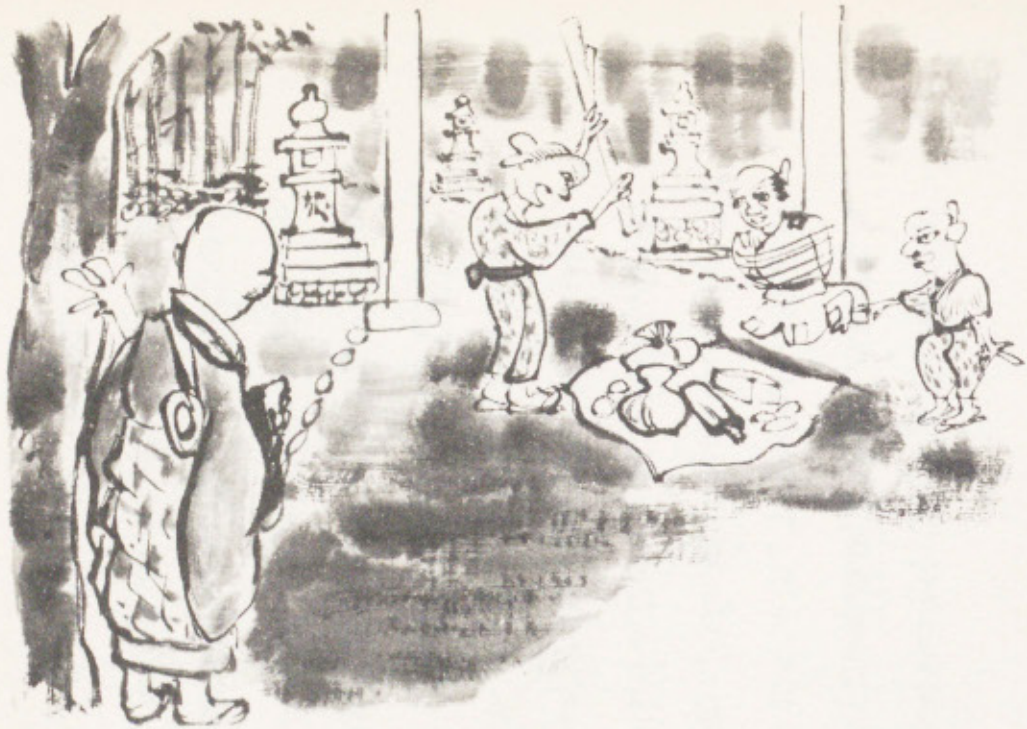
こいつめ。うわさの大どろぼうにちがいない。村じゅうをあらしたのは、こいつのしわざじゃつたのか。それにしてもなんたるこのざまじゃ。

ようし。

おしょうさんは、ふといなわをもつてきて、稲荷さまの赤いどりにしぼりつけんさつた。そこで、ようやく目をさました大どろぼうは、

「ウ、ウー。なにをする。ウー。」

と、大あくびをしながら、あたりをキョロキョロ見まわして、ポカんとまのぬけた顔をしておる。



さ。ほら、こんなにたんとな。大きなふるしきにつつんで、こつそり外へ出た。そしたらちやうど、稲荷さまのまえに、大八車があつたんで、こりやあしめたと、にもつをのせて、おらの家へ急いでかえつた。そしたら、かかあが、『おてがら、おてがら。と、よろこびやあがつて、酒をたんとたんと、のませてくれた。そのうちにいい気ぶんになって、ねてしまった。それなのに、まんだ、こんな寺におるとは、お

「どうなされた。これはいったい。おしょうさんは、おかしいのをこらえてまじめな顔でききんさつた。」

「こら。おしょう。なわをとけ。おれさまもあろうものが、てまえらに、おめおめとつかまつてたまるか。そこらにおるふぬけとは、わけがちがう。ちよつと、名のしれた大どろぼうの安じゃ。」

「そんなら、じたばたするでない。どろぼうをして、いばりかえるものがあるか。おい。安とやら。もう観念しろ。いったいおまえは、この寺でなにをしたんや。」

大どろぼうは、しばらくわいわいわめいていたが、どうにもならんとさどつたのか、やがて、おとなしくなつて、

「おらあ、ゆうべ、この寺へしのびこんだ。おしょうが、ようねこんどつたで、金目になるものをかたっぱしから、しつけいたしたん

らあ、いったいどうしたというんじやろ。きっぱりわけがわからんわい。」

と、ひげもじやな顔をたたいたり、耳をひっぱったりしていた。

その顔のおかしいこと。おかしいこと。

きのう心配してきた村のれんちゆうも、また、やってきて、

「こら、ニワトリかえせ。」

「米かえせ。とうとうつかまつたか。バカもの。」

と、手でこづいたり足でけったり……。

おしょうさんは、どろぼうを二、三日そのまんまにして、説教し、
にがしてやりんさったそうや。村のどろぼうさわぎは、しずまった
ことはいうまでもない。

キツネずきなおしょうさんは、あいかわらず夜になると、キツネ
たちとあそんで、かわいがりんさったそうや。

それから、何年かすぎたある日のこと、

おしょうさんが、飛鳥観音からかえられるとちゆう、ハカゴ山のふ
もとにさしかかると、後からばたばたと、おいかけてくるものがある。
見ると白髯の行者。びつくりされると、

「門前の稲荷さまも、ずいぶんあれしてしまった。あすの朝、湧川と
いうものが、稲荷堂を寄進するので、その男をたよって新しく建
てなおすのじゃ。」

と、告げ、そのままふつと姿が、きえてしまった。

おしょうさんは、ふしぎに思いながら、ひとばんをあかさされた。

よく朝、まだくらいうちに、

「もうし。もうし。おしょうさん。」

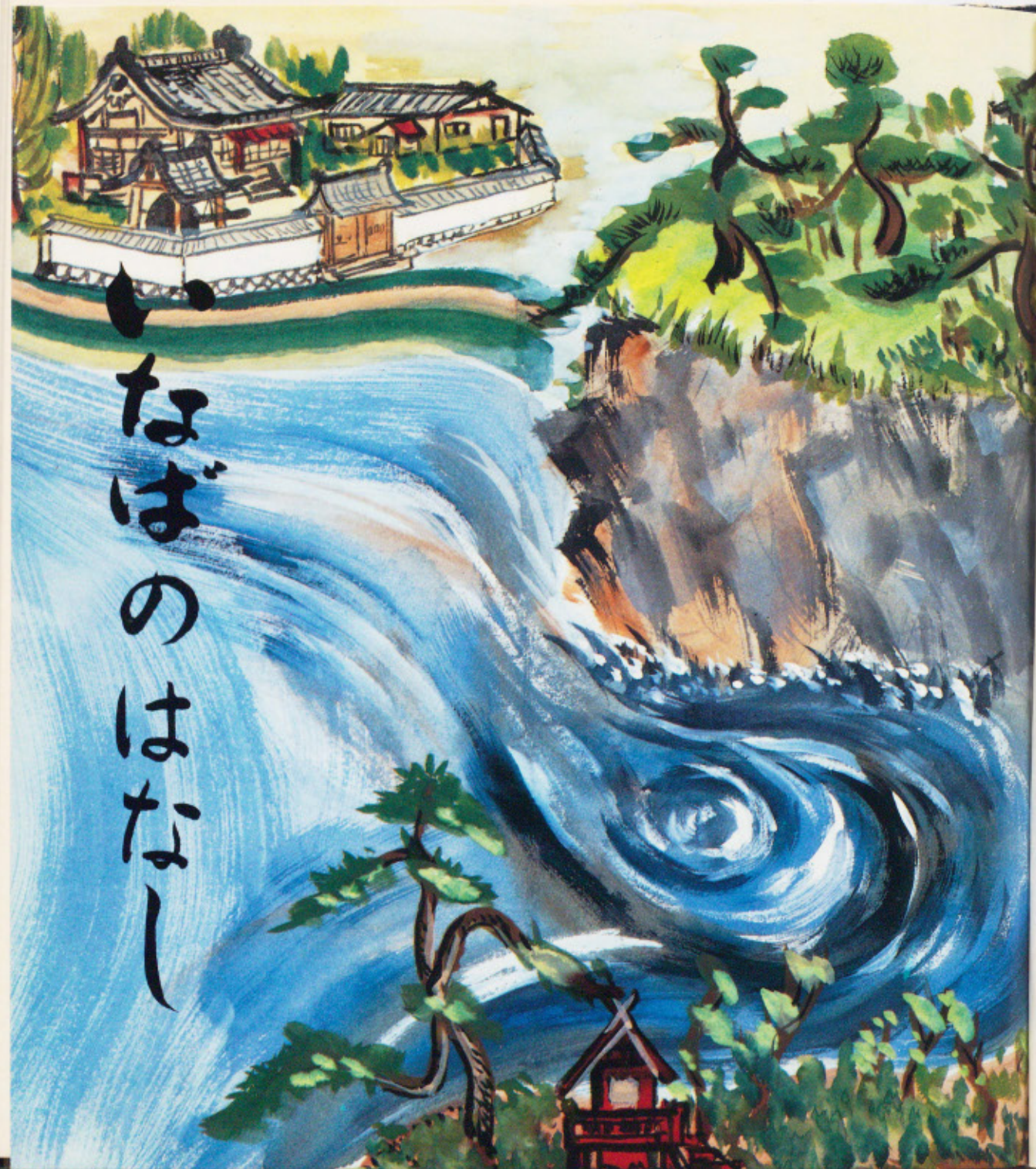
と、いう声が門前ですので出ていくと、大工姿をした大男が、土
下座をして、



「わたしは、湧川と申す大工。さ
く夜、夢の中にキツネがあらわ
われ、『少林寺に、稲荷さまが、
まつられている。おまえのうで
で、稲荷堂をたてなおせ。おし
ようにもつげておいたから、日
をのばすことなく夜があけたら、
ただちに寺へ行って、おしよ
によく話せ。そうすれば、おま
えは、りっぱな大工として世に
出る。』と、いうのです。それで、
わたしは、ただいまはせさんじ
ました。どうか、わたしにやら



せてください。おたのみもうす。」
と、いつて面をあげ、じつと、お
しよをみつめた。
朝日が、その顔をてらした。お
しよは、ふたたび、びっくりし
てみつめなおされた。
それもそのはず、何年か前に、
ここでつかまえた大どろぼうそつ
くりの顔じゃったんやそうや。
ますますふしぎにおもわれたお
しよさんは、もちろん、ふたつ
へんじて、その男に稲荷堂の建築
をまかされたというこつちや。



い
な
ば
の
は
な
し

そんなことがあってから、ずいぶん年月はたったが、今も
りっぱな稲荷堂いなりどうがのこっていて、みんな、まいらっしゃるんじゃ。

長谷川 恭子

西入坊のへびによろぼう

ずっとむかし、『河野西入坊』というお寺に、行念というごえんさまがおった。

情の深いごえんさまで、村の人たちは、よるたびに、「ぎょうねんさま、ぎょうねんさま」と、たいへんしたっていたそうだ。

ある秋のことだ。行念さんが、いつものように、村の人たちをよんで、ありがたいお経の話をしていると、むすめがひとり、しゅうりつとはいつてきた。そして、村の人たちのいちばんうしろに、ほそつとすわった。



「ごえんさま、わたしは、きょうまでのいのちです。あしたの朝はもうこの世のものではなくなります。ところが、わたしは、生まれてから、ずっと、人にめいわくをかけてきました。悪いことをしたわけではありません。でも、わたしを見て通る人は、みんなびつくりして、おそろしがります。そして、わたしをきらいます。わたしは、そのたびにずかしい思いをしてきました。はじめのうちは、どうして

行念さんの話をしずかに聞きはじめた。

「はて、見かけんむすめやが、いったいだれやろ。」

行念さんはふしぎに思った。

まんじりと見ると、色の白い、若くて、とても美しいむすめだ。

村の人たちの中にも、気になって、ちらつと見る者がひとり、ふたり――。

そのうちにお経の話もおわった。

むすめは、きた時とおなじで、やっぱり、ほそつと帰って行った。

二日め。三日め。むすめは毎日やってくる。いつでもしずかに。

行念さんは、若いむすめがこうして毎日くるのは、何かわけがあるのにちがいないと思って、何日めかに、そのわけをたずねてみた。すると、むすめは、

なのかわかりませんでした。でも、そのうちに、これは生まれる前に、何かとんでもない悪いことをしたにちがいない。みんなにきらわれるのは、そのむくいにちがいない。そう思うようになって、たのです。それで、ごえんさまの教えにおすがりして、少しでもつみをゆるしていただきたいと思って、こうして、おまいりをしてるのでございます。」

ひくい声だが、はっきりした口ぶりで答えた。

行念^{ぎょうねん}さんは、うで組みをして、じいっと聞いとった。だが、行念^{ぎょうねん}さんにはどうしてもわからないことがある。

「むすめさん、おまえさまは、そうも若^{わか}こうて、だれにもまけんぐらいべっぴんやに、なんしておそれられたり、きらわれたりするんやな。」

「はい。わたしは、こうしてごえんさまの教えを受けにくるときだ

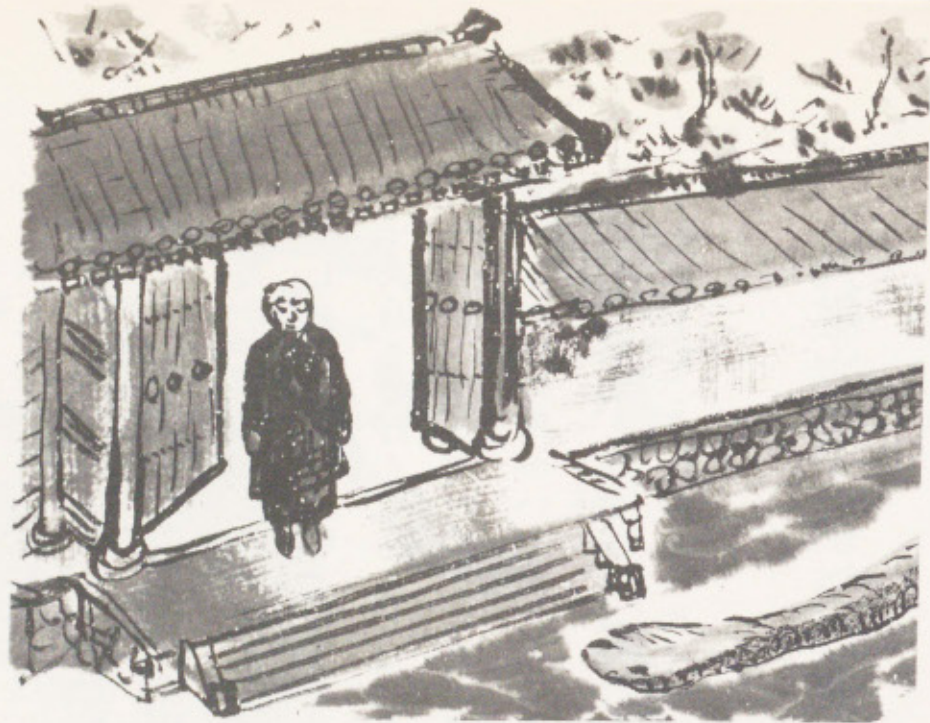
け、こんなに美しいすがたになれるんです。ふだんは、わが身^みがおどろくほど、みにくいすがたなんです。」

「すると、おまえさまは、なんぞの化身^{けしん}やと言いんさるか。」

「そのとおりでございます。ごえんさまの前に、みにくいすがたをお見せするのはつみの深いことです。それで、わたしのすんでいる池のそばの、春日^{かすが}の神さまにおねがいして、いのちとひきかえに、ごえんさまのところへくるときだけ、こんなに美しいすがたにしていただいているのです。七日の間だけというやくそくできょうがやくそくの七日めでございます。」

「それで、あしたの朝はこの世のものではないと言いんさったか。」
行念^{ぎょうねん}さんは、むすめのかわいそうな話に、大きなためいきをついた。

むすめは、まっ黒にすんだ瞳^めに、なみだをうかべてうつむい



ないから、朝早く、行念さんに見つけてほしいと言うと、しずかに帰っていった。

さて、次の朝だ。行念さんは、だれよりも早く目をさました。

外はまだ、夜のなごりの朝もやがたっている。東の空にうっすらと夜明けの陽がさしている。行念さんの首すじにひんやり朝つゆがおりてくる。

行念さんは、いそいで門をあけた。とたんに、はっとして、その場にすわりこんでしまった。そう



ったが、そぼつと、顔をあげると、
「わたしは、ごえんさまのそばに、
いつまでもおいていただきたい
と思っております。どうか、わ
たしの身がらを、お寺のすみに
うめてください。」

そう言っただのんだ。

そこはそれ、情の深い行念さんのことだ、心よくひきうけてやったそうだ。

むすめは、すっかり安心したんだらう、ほっこりとわらって、自分のすがたはだれにも見られたく



夫婦岩のてんぐの話

して、しずかにお経をとなえはじめた。

なにを見たんだろうか。行念さんの小さなひとり言が聞こえる。

「ああ、あのむすめは、春日神社の池にすんどった、大蛇の化身や
ったか。人のすがたをしとらんだだけで、悪いことなんぞ、なんに
もしとらん、生きとるうちはみんなにきらわれ、死んでからま
で人目をさけんならんとは。なんともあわれなことやないか。」
門の前には、身のたけ九尺（およそ三メートル）もあるだろうか、
大きな大蛇の死がいが横たわっていた。

行念さんは、お経をすませると、むすめとのやくそくどおり、納骨堂の下に、きちんとうめてやったということだ。

中村 勝行

ずんずんむかし、夫婦岩めおといわのてっぺんに、てんぐがおったげな。

「ホヤー、ホヤーって、さけんぢよるんを聞いた。」

っていう、じっさまがおったげな。

「バサン、バサンって、はねをならしちよるんを聞いた。」

っていう、ばっさまがおったげな。

おっとうは、

「おてんとさんがしずんでまうと、てんぐが子どもを食いにおりてくるで、はよイネかつがなあかんで。」

って、言っただげな。

おっかあは、

「てんぐさあは、おっかああのをしごとを手つだわん子が、いっとうすきやで、おめえ、はよ糸まけって。」



って、言っただげな。

子どもらは、

「てんぐさあに食われんように。」

「てんぐさあにすかれんように。」

って、おっとうのしごと、おっかあああのごとも、みんなよう手つだっただげな。

中村 勝行



べんてんさまのびわ

たあんとむかし、矢熊山のふもとに、べんてんさまの、おやしろがあつたんやと。

屋根はあなだらけ、かべはやぶれてぼろんぼろ。中を見ると、クモが、ねぐらの糸をいっばいはつて、かれ葉の下には、ネズミも住んどつたげなわ。

そやけど、村の衆んたあの中には、だあれもおそうとする者がおらん。それどころか、花をそなえることさえもせなんだそうや。それやで、べんてんさまの花いけの竹のつつも、おそなえもんのちやわんも、いつもからつぽやったそうや。

そのあたりはな、木曾川が大きく曲る、ちょうどまん中あたりで、大水がドンボラ、ドンボラ流れとつて、そらあこわいとこや。

矢熊山の^{やぐまさん}大岩があるで、村まで水が流れてくることはめつたにないが、それでも、村の衆んたあは、いつ田や畑が流されてまうかわかつたもんやないつて、しよつちゆう、不安でなんなんだんや。

ある日、その心配が、とうとうほんとになつてまつた。

ザンザラぶりの雨の中を、木曾川がおこつたようにあばれだしてな。白い大きな波をたてて、矢熊山の^{やぐまさん}大岩めがけてぶちあたっていくんや。

そのようすといつたら、そらあすさまじい。波を打つときは、バリンコ、バリンコ。ひくときは、ドロロン、ドロロン。ものすごい音をたててな。



村の衆しゅうんたあは、

「おーい、そっちのぐあいはどうやあ！」

「田んぼに水がはいつとらへんかあ！」

「村の方は、まんだだいじょうぶやあ！」

おたがいによび合つて、そらもう、大きなさわぎになつたんや。

エンヤセ、エンヤセ。

ホイヤセ、ホイヤセ。

たわらをかついで来る者もの。竹の枝えだを切つて来る者もの。それで、くずれにかかつたていぼうをせき止める者もの——。みんないっしょうけんめいや。

そやけど、水はちつとも止まろうとせえへん。ザンザラふる雨で水かさがふえて、どんどん、流れが強うなるばかりや。

そのうちに、せき止めたたわらも、竹の枝えだも、みんな流されてま

つて、どうとう水が、田や畑に流れこみはじめた。そのいきおいのすさまじいこと。

若い男衆は、

「もうあかん、これ以上流れを止めることはできん。年よりのじいも、

「どうしようもない。わしんたあのカではなんともならん。」

そう言い合つて、みんなその場にヘツタリ、すわりこんでまった。女衆の中には、

「わしがつつた米が流れてまう。」

「うちのなつぱがみんな流れていきよる。」

「どうすらええ。どうすらええんや。」

オロン、オロン泣き出す者もでるしまつや。

それでも、そんな村の衆んたあのことなんぞ、ちつともしらん顔

で、水は、どんどん村の方に流れていく。

そんなひとばんがたったよく朝。村の衆んたあは、もうだれも声も出せんほどに、まいりこんでまっておった。

ところが、そのとき、どこからかやさしい歌声が聞こえてきたんや。びわをひきひき、まこと美しい声でな。

「だれやろう。」

「どつからや。」

「ああもきれいな声、聞いたことがないが。」

村の衆んたあが、目ん玉うんと広げて、耳たぶごしごしこすつて、あつちこつちさがしまわつとると、

「あつ、あそこや。大岩のてっぺんやあ！」

年よりのじいがゆびをさす方を見ると、なんと、べんてんさまやないか。



べんてんさまは、なにやらよう聞きとれんが、赤んぼうをあやす
ようなちようしで、うたっておいでなさつて、その歌声が、びわの
音といっしょに、大波にぐんぐんすいこまれていきよる。
すると、ふしぎなこともあるもんや。大波はみるみる静ま^{しず}まって、
あれほどたけりくるつとつた川の流れも、たちまちおとなしな^なって
まった。そうして、べんてんさまが、もういっぺん

ポルーン

つて、びわをおひきなさると、こんどは、大きなうずになって、大岩のふもとをまわりはじめたやないか。

ぐるりん、ぐるりん。のったり、のったり。

すつかり、たのしげにな。

村の衆しやうんたあのよろこびようつたらなかつたげな。

「やれ、わしんたあの村が助かった。」

「ほれ見てみい、田んぼからも、畑からも、どんどん水がひいていくに。」

口々に言い合つて、だれかれなしに手をとり合つたげな。

そして、だれかが、

「べんてんさまのおかげや。べんてんさまが、わしんたあの村を助

けておくんさつた。」

つて言うと、またもうひとりが、

「わしんたあは、べんてんさまのそうじひとつしたらんに、花ひとつあげたことがないに。それでも、べんてんさまは、わしんたあを助けておくんさつた。」

そう言つて、べんてんさまにむかつて手を合わせたげな。

そうだった、そうだった。村の衆しやうんたあは、はじめて、べんてんさまをそまつにしとつたことはずかしく思つたげな。

それからというもの、べんてんさまのおやしろには、いつも竹のつちに花がかざられるようになったし、ちゃわんには、だんごがおそなえしてあるようになったということや。

中村 勝行



じつろひやじき

やつとむかしの話や。
木曾川きそがわの下流しもの川岸がわに、山脇村やまわきむらという、小さい村があつたんや。すぐ前を木曾川きそがわが流れてな、すぐうしろには、三井山みやまが高くそびえとつた。そやから、村といつても、わずか十けん足らずの家が、山のふもとにへばりつくようになつただけや。

田んぼや畑にしても、山のすそにわずかあるだけや。そらあ、木曾川きそがわの向う岸がわにあれ地はあつたがな、大きな石がゴロンゴロンしとつたり、すすきがボワボワにしげとつたもんで、だあれもたがやそうとしやへなんだ。

そやから、村の人んたあの食うもんつていつたら、少しの米と、少しの野さいと、ときたまとれる、木曾川きそがわの魚ぐらいのもんやつたそうや。

それでもな、村の人んたあは、みんなしょうじきない人ばっかりやつたで、とれた米や野さいは、なかまで食つとつたんやと。

でもな、なんしろ土地がせまいやろ。それに、木曾川きそがわがはらんすることあつて、一年のうちに、何日も水と、草の実ばかり食わんならんこともあつたりで、そらあびんぼうなくらしやつたんやと。

ある夏のことや。

にわかにながくもつてきよつた。なまりのような雲が空いっぱいになりよつた。まだ昼やのに、あたりが夕やみのように暗くなりよつた。そうして、いなずまがまっ白な光をはなつたと思うと、いきなり、大つぶの雨がどつどつとふつてきよつた。大風もふきだした。すると、今の今まで、静かに流れとつた川が、急にゴワゴワと音をたてて、あれくるいだしたんや。

そのいきおいていいたら、まるで、リュウが口から火をふきながら、岩をかみくだいて、はいずり回っているみたいでな。

村の人んたあは、

「水神さんがおこつとる。」

「水神さんがおこりんさつた。だれやしらん、水神さんの氣にいらんことをしてしまつた。」

つて。こわいこわいつて。頭のとつぺんまで、ブルブルふるつて、ひと夜さ中おいのりをしたんや。

やけど、川はおさまらん。村の人んたあおいのりを聞いてくれんで、三日三ばんあれくるつとる。こまつてまつた村の人んたあは、どうとう、四日めの夜さ、庄屋さんの家を集まつて、

「水神さんの氣をとりなおしてもらうには、三井山に登つて、天の水神さんにおねがいするほかない。」

つて、話し合つた。

そうして、ふりしきる雨ん中を、ようけおそなえ物をもつて、三井山の頂上に登つていきんさつた。

村の人んたあは、大きなかがり火をたいて、いっしょうけんめい、天に向つておいのりをしんさつた。

すると、どうや。東の空から、ひとすじの光が、向こう岸のあれ



地を、こうこうとてらしだしたやないか。そうして、あたりがしだいに明るくなってきよった。

さっきまでふっておった雨がやんだ。

大風もふかんようになった。

今まであれくるっておった川が、まるで、うそみたいに、もとの静かな流れにもどってまった。

村の人んたあは、

「やれやれ、ありがたいこつちや。天の神さんが、わしんたあのねがいをかなえておくんさった。」

「ほうや、天の神さんが、わしんたあの村を助けておくんさった。」
ありがたいこつちや、うれしいこつちやつと行ってよろこび合つて、村へ帰っていったそうや。

五日めの朝がきた。

村の人んたあは、やつとかめに、静か^{しずか}でへいわな日をむかえることができた。

ほんでもな、ふしぎなことがおきていたんやで。きんのう、ちよ^{ちよ}うど、さいしよの光がさした向こう岸のあれ地に、小^ちつさい小屋がたつておつたんや。そんでな、おじいさんがひとり、くわをふりあげて、せつせとあれ地をたがやしとる。

村の人んたあはおどろいたわなあ。

「あんなどこに、いつのまに小屋ができよつた。」
つて。

「畑を作つとるようやが、わしらが作ろうとしてもかなわんあれ地にできるんやろか。」
つて。

「それにしてもふしぎなんは、あのじいさんやわ。どつからおんさつたもんか。」

つて。

だれもかれも、ふしぎや、ふしぎやつて。向こう岸のようすをじつと見とつたげなわ。

そのうちに、そのわけがしりたいたんやな。庄屋^{しやうや}さんが、村の代表で、おじいさんに会いに行くことにしたんや。

でもよ、おじいさんは、庄屋^{しやうや}さんがなにを聞いても、なんにも答えてくれへん。

「おじいさんは、どつからおんさつたな。」

「なんで、こんなあれ地をたがやす気になりんさつたな。」

おじいさんはただにこにこ、にこにこわらつとるばかり。

庄屋^{しやうや}さんは、しかたがないもんで、さいごに、おじいさんの名ま

えを聞いた。

「甚六じんろくといますだ。」

それにだけ、はつきり答えたで。

そやから、村の人んたあは、おじいさんのことについては、「甚六じんろく」
つて名まえのほかには、だれも、なんにもしらん。

村の子どもらはおもしろい。日がたつにつれて、だれが作ったと
もなしに、おじいさんのことを歌にしてまつた。

じんろくじいさんお人よし

どつからきんさつたな

にいここにこ

どうやってきんさつたな

にいここにこ

甚六じんろくじいさんは、はたらき者かたやつた。

あれ地に住みついてから、三日で畑を作つてまつた。七日たつた
ら、田んぼを作つてまつた。

畑には、いもやとうもろこしや、そのほかいっぱいできまつた。

秋になると、田んぼには、こがね色の米が、重たそうに実りよつた。

でもよ、甚六じんろくじいさんはひとりやろ、よめさんも子どももおらん
で、そんなにようけの米や野さいはとても食いきれん。そんでな、

甚六じんろくじいさんは舟ふねを作つたんや。舟ふねに米や野さいをいっぱいひかせて、
村へいつては、こまつとる人に分けてやつたんや。そやから、村の
人んたあは、今までのように食うもんにこまらんよつた。草
の実を食わんでもすむよつた。

村の人んたあは、いつのまにか、甚六じんろくじいさんのことを、
「天の神さんのお使いや。」

「天の神さんが、わしらのこまつとるのをみて、助け人をさずけて
おくんさつたんや。」

つてうわきをするようになった。

子どもらはやっぱりおもしろい。歌にしつぽをつけてしまった。

じんろくじいさんお人よし

どっからきんさつたな

にいこにこ

どうやってきんさつたな

にいこにこ

庄屋さんが聞いても答えやへん

お殿さんが聞いても答えやへん

わしら天の神さんのお使いやと思つちよる

月日の流れは早いもんや。

甚六じいさんが村に住みついて数年たつてまつた。

その日は、朝からほんとにええてんきやった。三井山の小鳥ども
はそろつて、きれいにうたつとる。川は青くすんで、中をおよぐア
ユのむれがよう見える。庄屋さんのこぐ舟が水にうつつて、かがみ
の中をいくようや。

「甚六じいさん、きょうは、そうだんがあつてきたんや。ひとつ村
のために、ほねおつてくれんさらんか。」

庄屋さんが言んさつた。

「こらあ、こらあ庄屋さん、こんなじじいにほねおれとは、いった
いなにごとですかな。」

甚六じいさんが聞きんさつた。

庄屋さんは、ゆんべ、村の寄り合いで話し合つたことを、甚六じ



いさんに話しんさった。

ゆつくりとな。ぜんぶやぞ。

——甚六じいさんがこの村におんさつてから、食うもんにこまらんですむようになつた。でもよ、いつまでたよつとるわけにいかん。それで、自分たあも、甚六じいさんみたいに、あれ地でもなんでもたがやして、こまらんだけの作物がとれる田んぼや、畑を作ろうやないか。そやけど、こんな小さい村ではたがやそうにも土地もない。どうしやあええかわからん。甚六じいさんに、ちえを借りることにしようやないか。——
つてな。

甚六じいさんは、しわだらけの顔に、にっこり笑みをうかべてよ、「あしたきなされ。」

そう言つて、舟ん^{ふね}のつて、どっかへ出かけてまつた。

その夜さ、川は、ひさしぶりに、
大あれにあれよった。

やっぱり、大つぶの雨がふって、
大風がふいて、村中の雨戸をドン
ドンたたきよった。

つぎの日や。庄屋さんや村の人
んたあは、外に出てみてびっくり。
村の前を流れとった川が、ずうつ
と向こうを流れとったからや。そ
して、川のあとは、たがやすなら、
田んぼや畑になる、広い土地にか
わつとったからや。

ところがよ、甚六じいさんのす



がたはどっこにも見えん。村の人んたあは、みんなで手分けしてさ
がした。けど、どっこにもおらん。だれもよう見つけなんだ。

村の人んたあは、

「やっぱり、神さんのお使いやった。」

「天の神さんのお使いやった。」

そう言い合って、甚六じいさんのたがやした向こう岸の土地をみん
なでまもるそうだんをしたんや。

それからは、甚六じいさんの住んどった小屋のあたりを、「甚六や
しき」とよぶようにしたんやと。

あわずのちようちん



それはそれは、むかしのこと。となり村に竹宗たけむねという、ひとりのおきむらいさんが、住んでいなされた。

そりゃあ、りりしいおかたでの。鼻はなすじはとおって高く、めは、ランランとかがやき、口はま一文いちもんじ字にむすんでな、まったく、ほれぼれするようなおかたじゃった。

それでな、村の若いむすめごらは、みんなこのおきむらいに、たとえひとことなりとも、ことばをかけてもらいたいものだと思っっていたんやっつて。

できることなら、嫁よめにもらってほしいとすら、思ったかもしれん。

ところが、その竹宗たけむねさまには、すでにな、ひとりのいいなづけがあつて、どうにもならんかつたんや。"やえ"といつて、生まれる前から、竹宗たけむねの嫁よめさんにと、やくそくされていたんやな。むかしのこどやで、いったんこうきめたいじょう、それをかえることは、まず、できなんだじゃわい。

もちろん、この前渡村まえわたりのむすめじゃ。

それがのう、生まれた時には、あまり目だたなかつたんじゃが、顔かほに黒いあざがあつてのう。だんだん大きくなるにつれ、はつきりとわかるようになってきたんや。そのうえ、かわいそうに片足がすこし、みじかかつたという。

それで、なんとかなおらねえもんかと薬草やくそうをせんじてのんだり、いしやどのに見てもらつたりしたんじゃが、むしろ、ますます、こくなるばかり。

男つぶりのいい竹宗たけむねにくらべて、なんと、いじのわるいくみあわせになつたんじやろう。

竹宗たけむねは、いったんとりきめたこのちぎり、さむらいの名にかけても、まもりとおさねば。と、やえの気だてがええだけに、なんども、自分にいいきかせてはみたものの、やっぱり年ごろになつた今、あうたびごとに、いや気がさしてきたらしい。

けれど、やえのほうは、竹宗たけむねが、したわしゆうて、したわしゆうて、その思いはつのるばかりじゃつた。夫婦めかけになれる日をまちのぞんでの。まい日、文ふみをおくつた。竹宗たけむねのためならなんでもしよう。

この身がはてるまでにど。そりやあ、よく、つくしたそうな。竹宗たけむねが、いくさに出かけた時なんぞは、常貞寺じょうていじや八幡神社はちまんじんじゃに詣まがで、無事むじをいのつたりもしたそうな。

ところがじゃ。

月のないまつくらな、
ある夜のこと。

きちんと髪かみをゆい、
あたらしくぬいあげら
れた羽織はおりをはおつて、
やえが、いそいそと常
貞寺ていじ前のつつみをあが
つてきた。

ちようちんのあかり
にはえるやえの顔は、
いつもとちがつて、う
つくしくかがやき、あ
かみをおびておつた。



それもそのはず、竹宗たけむねからひさしぶりにとどいた文ぶんに、水無月みなづきの十日、五ツ半の刻ときに、つつみであおう。と、かいてあつたんや。

やえは、きつと竹宗たけむねから、やさしいことばをかけてもらえるにちがないと思つて、胸むねをはずませ、いそいでいった。片手にかかえた重箱おむすびには、やえが一日中かかつて作つた竹宗たけむねのすきなごちそうが、いっばいつめてあつたにちがない。

どんどん、つつみを小走りに西へ西へと進んでいった。

それでも、竹宗たけむねのすがたは、どこにも見あたらず、とうとう、神置かみおきの八幡はちまん神社までできてしまった。

「はよう、竹宗たけむねさまに、あわせてください。」

と、いっしんにおいのりをし、かしわ手をうった時じやつた。

カサカサと、雑木ぞうきのゆれる音がしたかと思うと、黒いふく面の男が、やえのうしろに立ってサツと刀をふりおろした。

やえが、ふりむくとどうじじやつた。

やえは、ぱつたりとたおれた。

ちようちんはころがつて、あかあかともえ、やがてきえた。

それからどれくらいたつてからやろ。やえがおらんようになった、おかしいなあど、うわきにのぼつたころからや。

月のないやみ夜にかぎつて、常貞寺じょうていじの前まへから神置かみおきまでのつつみを歩くと、ちやんと、人のすがたの見えないちようちんをだれかが、見るといふんじや。

それがふしぎなことに、スタスタ、スタスタと、ぞうりの音だけがたかく聞こえてくると、目の前に、だんだんあかりのついたちようちんが近づいてくるんやと。

「ありやりや。なんだ。」

と、よく目をひらいて見るんじやが、どうしてもすがたが見えな
いんじやと。

そして、ちょうど二、三間^けまえまできて、ハタとその足音がとま
ったかと思うと、ふつと、ちょうちんのあかりもきえるんやと。

するとな、こんどはうしろに足音がするんで、ふりかえると、ま
た、ちょうちんにあかりがともし、シヤリシヤリ、スタスタ、ぞう
りの音だけがきこえて、だんだんあかりが、とおざかっていくそう
な。みんなきみわるがってな、やみ夜には、外へ出なんだ。

そのうちに村では、やえじゃなかるうか。きつとこれは、やえが、
竹宗^{たけむね}に会いたくても、会えなかった思いが、このちょうちんにもえ
ているのにちがいないとだれもが思いはじめたんや。

そして、だれいうとなく、

“あわずのちょうちん”あわずのちょうちん”

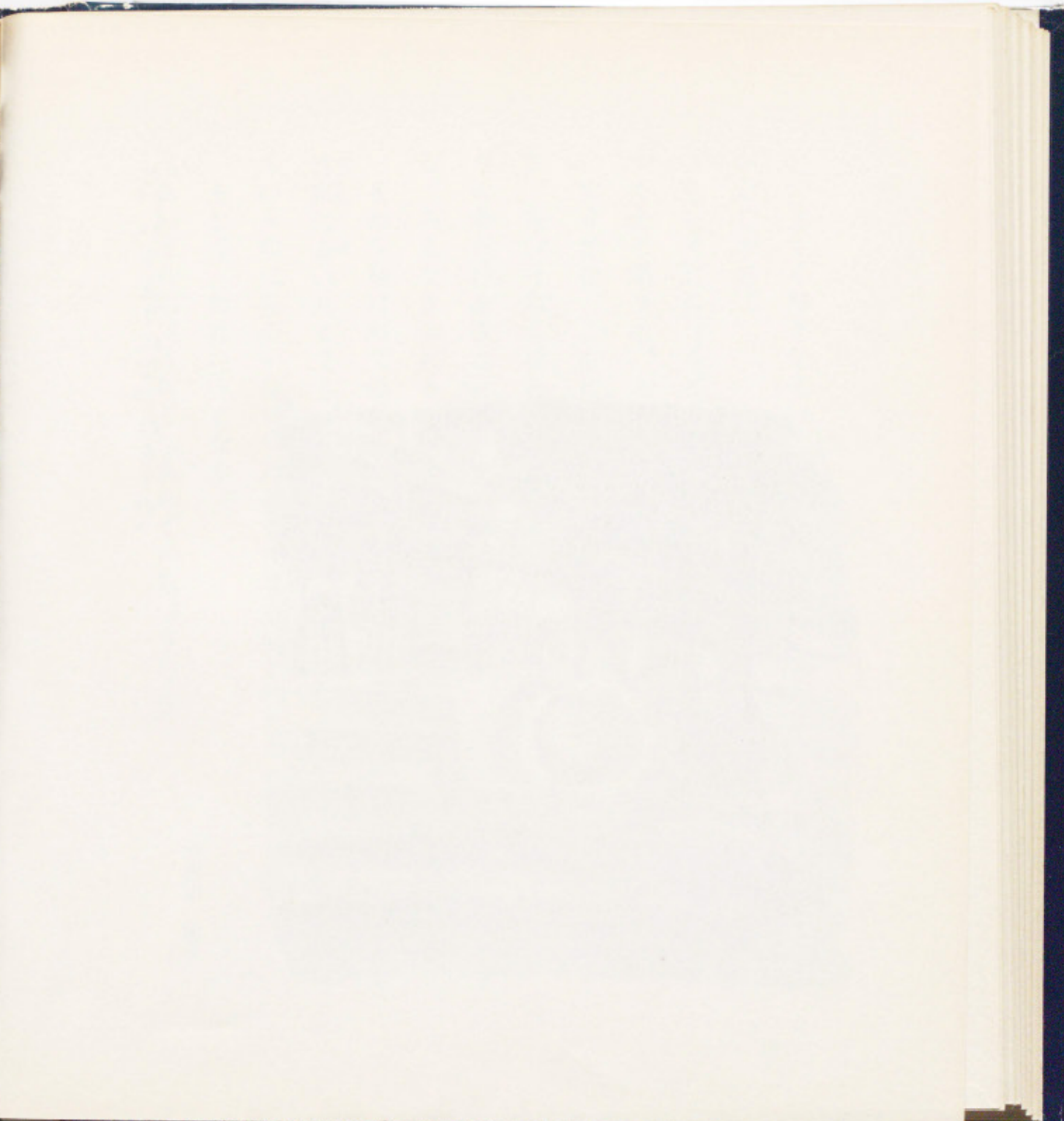
と、いうようになったそうや。



長谷川 恭子



う
ぬ
ま
の
は
な
し



おがせ池の宝刀いけ ほうとう

むかし、おがせ池の底そこに、大蛇だいじょうがいてな。ときどき村里むらへ出てきては、畑をあらし、家畜かちくをくいころしていくんで、みんなこわがっていたと。



ある年の夏、たいへんな日照りでがつづいてな。この池の水もかれになつた。百姓ひやくしやうしゅうは、とんどこまりはて、まい日、まい日、そう出で、雨ごいをしたと。夜には、たいマツを両手りやうてにもつて、山から池のまわりへと、ねってあるいたそうな。そりゃあ、みごとなあかりじゃつた。

けども、雨は、ちつともふらん。とうとう惣八郎そうはちろうという百姓頭しやうがらが
だいじなウマ十頭じゆと、ウシ十頭じゆを大蛇だいじやにくわしよと、赤いべべきせ
て、池のまん中へ、つれ出していった。

「蛇神へびがみさま。これをうけとつてくだせえ。そのかわり、雨を、雨を
くだせえ。」

と、いっしんにいのつたと。

すると、どうじゃ。ウマが、ヒーンとはねあがり、うしろ足をつ
っぱったまま、まえ足をバタバタさせたかとおもうと、大つぶな雨
が、ぶちやけるようにふりはじめた。池の水は、みるみるうちにふ
えていって、うずをまきだしたのや。

そして、あつというまに、惣八郎そうはちろうもろともしずんでしまったと。

たいマツはきえ、くらやみに雷光らいこうだけが、矢やのように走りまわつ
た。

まる三日間、ふりつづいたあとは、うそのようにはれわたった。

池も、なんにもなかったように、しずかに水をたたえていたんや。

三年の月日がすぎた。百姓しゅうは、一日だって、惣八郎そうはちろうのこと
をわすれなんだ。

きょうは、朝から百姓しゅうが、おおぜい集まって三回忌さんかいぎをいど
なむために、お坊さんぼくしやうをまねき、お経きやうをあげてもらっている時だつ
た。

池の中から、だれやら顔を出し、こちらへ泳いでくるではないか。
みんな目をこすって見つめた。

「あつ。惣八郎そうはちろう。惣八郎だ。」

ほんに、まちがいもなく惣八郎だ。死んだとばかりおもっていた
のにふしぎなことがあるもんよ。

ぼかんとしてゐるみんなの前で、
惣八郎は、こんな話をはじめた。

「おらあ、あの日、めがくらみ、
体がしびれてまって、ぜんぜん
おぼえがなくなつたまんま、池
のおく底へひきずりこまれたん
や。『いたい。いたい。』と、うめ
く声に、ふつと気がつくど、な
んとまあ、足もとに、頭をもた
げ、のたうちまわっている大蛇
がいるのや。おらあ、たまげて
声が出なんだ。にげようとした
けど、体も動かん。大蛇は、お



らあのひぎへきて、『ここをさすつ
てくれ。さすつてくれ。』と、ふく
れあがった腹をむけるんや。こわ
ごわさすつてやった。なんども、
なんどもな。

すると、大きな口をあけて、く
るしげに太刀をはき出した。そし
て、やつとしずかになり、

『わたしは、この池に千年も住ん
でいる主だが、あの日でりから、
からだがよわってしまった。む
かしは、ずいぶん村で、悪事を
かさねてきたので、なかなか往

生じやうできん。おまえが、村へ帰かへつたら、坊ぼくさんになつてな、み仏ぼつの
力ちからによつて、わたしの解げ脱だつをみちびいてほしい。この太た刀ちは、わ
たしのただひとつの宝たからだが、さしあげる。いつまでもだいじにす
るとよい。わたしが往わう生じやうできれば、この太た刀ちはきつと村むらを守まもつて
くれるだろう。さあ、もつていけ。」と、いうのでうけとると、も
う体ていはうきあがり、このとおりぶじに帰かへつてこれたんや。」

いまでも、この宝ほう刀とうは、池いけの近くちかくのほこらに祭まつられ、村むらの守まも神かみとし
て、おいのりがたえんそうな。

長谷川 恭子

若わか狭かさの八はつ百ひゃく比ひ丘く尼に

おがせの池いけばたに、それは氣きだてのええおばあさんが住すんどつて、
名なまえを「おきぬ」といった。

むすこはもちろん、そのよめさんも、まごも、みんなんこのおば
あをだいじにやしなつとつたんや。近くちかくの人ひとんたも、

「おきぬさ、おきぬさ。」

とたよりにしておつた。そやで、おきぬばあの家いへは、毎日まいにち、近ちか所ところの
人ひとや、子どもがたえなんだそうな。

そんなある日ひ、おばあおばあの齒はが急いそにいたみだいた。家いへ中なかの人ひとでひや



したり、薬をの
ましたりしたが、
いっこうによ
うならん。

おばあの顔は
はれあがつてま
つて、どうどう
目もあかへんほ
どになってまっ

たそうや。

そんなありさまでちょうど七日目。おきぬばあの苦しんごることを聞いて、同じ村にすむひとりのじいさまがやってきた。そして、

「これは、居飼惣八郎いけすけはちろうという男がおがせ池の竜宮りゅうぐうからみやげにもら

ってきた人魚をな、日ぼしにして、それをたたきつぶいてこなに
したもんや。どういう病気にもようきくそうやで、たいせつに、
しまつといたんや。これを飲んでみんさい。きつといたみはとれ
るはずや。」

そこでおばあは、このじいさまのいうとおり、そのこなの薬を飲
んでみた。するとどうや、あんなにいたんだ歯ははうそのようにかかる
うなつてな、おばあの顔のはれもすうつとひいてまった。家の者は
やれやれとよろこんでな、その晩はおばあをひとりにして、しずか
にねさせ、部屋をそうつと出たんや。

つぎの朝、家の者が、おばあを見に部屋へはいつていくとどうや、
その部屋には雪のようなはだをして、黒かみのつやつやした美しい
むすめさんがやすやすやねとるやないか。

家の者はおどろいたのなんの。目をようようこすつてなんども見